**№61　テーマ『仕事と人生（人生三観）』**

**講話日2018年6月8日**

**＜あいさつ＞**

**みなさんおはようございます。え〜梅雨に入りましてちょっと鬱陶しい日が続きますけども、外でお仕事なさる方は大変な時期に入りますけども、まぁ、健康に気をつけて頑張ってもらいたいと思います。今日は新入社員の方も何人かいらっしゃるということなので、一応社会に出て、社会人となって、仕事をしていく上で基本的に大事かなと思えるようなそういうこの課題についてお話しさせていただきたいという風に思っております。え〜一応、仕事と人生というテーマでお話しさせていただきたいと思います。まぁ、学校を出て社会人になると言われるわけですけども、あの〜学校を出ても社会に出ても仕事というものを持っていなければ社会人ではないんですね。仕事を持って初めて社会人という風に呼ばれるようになります。まぁそういう意味では、この社会の中で仕事をしていくためには、生きていくためには、まずその仕事とは何なのかという職業観と、社会とは何なのかという社会観と、それからこの仕事というものは対お客さんとの関係においてもですね、多くの方々と人間関係を持ちながら仕事をしていかなきゃなりませんので、そういう意味では確たる人間観という三つの観と申しましょうか、職業観と社会観と人間観、これがですね、社会の中で仕事を持って生きて行くそういうことのために基本的に重要な課題であると考えらえれる訳であります。**

**＜職業観＞**

**そういうことで、まずこの仕事をしていく上でですね、どういうことが大事なのか、職業観ということからお話しをしていきたいと思うんですけど、社会の中で仕事をしていく上で最も基本的に大事な精神というか心構えというのは、まず人を幸せにするということが一番に求められることであって、職業とは人を幸せにすることによって自分も幸せになる活動のことを職業と言います。職業というのは社会において成り立っている訳ですから、当然この対お客さんという多くの人との関係が出てきますけれども、職業というものにおいて一番大事にしなきゃならんことは、人を幸せにする力をつけるということなんですね。ついつい自分の幸せを先に求めてしまって、自分が幸せになるためにという風に仕事というものを考える方もいらっしゃると思うんですけども、まず自分が幸せになりたいと思うとどうしても自分を優先してしまって、自分の幸せのために人を犠牲にするという結果になってしまう場合が多い訳であります。だけど、人を不幸にしてしまって自分が幸せになってもですね、人に損をさせて自分が幸せになってもそれは一時のものであってですね、結果として人が不幸になれば、結果として自分に返ってきてしまって自分も不幸になってしまうというね、そういうことになってしまいます。家族、家庭においても家族を幸せにしないとそこの主人は幸せな気持ちで生きていくことができないというね、そういうことになります。そういう意味でも、とにかく社会というものの中で仕事をしていく上でまず大事なことは、自分の幸せというものも大事なんだけど、それ以上に人を幸せにしないと自分は幸せにならないんだという、そういう気持ちを持って仕事をしていくことが大事なんじゃないかと思います。人を幸せにすれば、その感謝の印にお金が入ってきて、そしてこの会社も発展し、自分も幸せになり、家族を養えて、家族に喜ばれて幸せになれるという、そういう循環が生まれてくる訳**

**ですね。会社、社会、会社、社会、そういうこの循環が社会の中で仕事をしていく上での基本的な方程式というかね、システムであります。まず仕事というものは人を幸せにすることによって自分も幸せになる活動であるということを心得てね、仕事というものはしていかなければなりません。人を幸せにする力がつくということは、その力がやがて必ずこの自分を幸せにする力に影響してきて、そして、自分にも幸せな春がやってくるみたいなね、そういうことになっていく訳なので、この順序っていうものはやはり間違えないようにしないと、幸せを求めながらも人を不幸にし、自分をも不幸にしてしまうような人生を歩んでしまうような人も随分と多い訳であります。その次に考えておかなければならないことですけども、え〜仕事の目的というものをやはりちゃんと意識していけないと。多くの人は仕事っていうものはお金を手に入れるために、お金を獲得するために仕事をするんだという、そういう心づもりというかね、そういう常識というものが、一般的にね、あるように思うんですよ。やっぱり仕事っていうものは生活するために金を獲得するためのものだという、そういう常識で仕事をしていらっしゃる方も多いと思うんですけど、だけどお金を目的に仕事をすると、人間は結果として、この悪がしこい人間になってしまいます。お金を目的に仕事をすることによって、利害打算というものを考えた、そういう仕事の仕方で儲からなければ仕事をする気にならない、儲かればなんでもするというような仕事になってしまって、本当に人に喜んでもらえるような、人を幸せにするような仕事、そういうような気持ちがなくなってしまって、だんだん儲かるような仕事ということを考えてしまって、人に損をさせるようなこともありますし、そういう意味ではこの人間関係においてですね、何かこう作為のある悪がしこい生き方っていうのはついつい出てきてしまう結果になりやすいんですよね。しかもこう、金に支配され、金に動かされ、お金に左右されるというね、金で動かされるような、そういう人間になってしまって、人間としては何かこう情のない、心においてもちょっとこう汚れたようなというかね、あまりよくない人間性が出来てしまう訳であります。こういうことであったんでは、やはり社会において他人から軽蔑されてしまってですね、仕事はよくできてもですね、人間性が悪いというね、そういうような状態になってしまうことが非常に懸念されます。だけどやっぱり仕事をしていく上では、お金は大事なことであって、どうしてもお金を儲けなればならないし、自分が生活していく上でもお金は必要ですから、お金っていうことは全然頭の中で考えないで人のためだけにやるのはこれはボランティアになってしまいますから、社会の中で仕事をしていくということにはならないと思います。経済社会の中で仕事をしていくということは結果としてお金はちゃんと儲けなければならない。だけどもお金というものをまず優先させればですね、必ず人間性は汚れるというかね、あまりよくない人間性になってしまって、金に支配されて、金に動かされるというね、そういう心ないことになってしまうと。そういうことを考えると我々は仕事をしていく上で何のために仕事をしているんだという風に考えることは、まぁこれは職業観として常に問題にされる課題であります。そもそも職業というものがですね、どういう風な原理で成り立つものなのかということを考えていきますと、やはり仕事というのはまずはですね、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をしないとお金は入ってこないという順序なんですよね。まず人に喜んでもらえるような仕事をする、人に感謝してもらえるような仕事の仕方をする、そうすると相手は喜んでくれて、そしてその仕事の報酬というものがですね、ちゃんとこう約束通りに入ってくるということになってきます。人に喜んでもらえないような仕事の仕方をしておりますと、結果としてやり直しをですね、命じられたり、あるいは相手に何かしら損害を与える場合には、損害賠償を求められたりという、そういうことになってしまって、結果として仕事にならないというかですね、人に喜んでもらえないような仕事の仕方をしていれば、会社は潰れますし、あいつには頼まないということになってきて、仕事がなくなる。これでは仕事になら**

**ない訳ですよね。まずお金の前に仕事のことで考えなければならないことは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をするっていうことが、仕事においてあらゆることにおいて優先するということなんですね。そのことを考えるならば、我々はまず仕事というものを通してね、何を目的にするべきなのか、まず仕事をする上で人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間になろうというね、そういう気持ちをまず持たないと職業人としてはですね、一人前にはなれないということですね。理想を言えばですね、この職業人というのはその仕事のプロですから、だからプロっていうのはお客さんから見て、さすがプロですね〜と言ってもらって初めて客は快く金を出してくれると。お客さんに快く払ってもらって、快く金を出してもらって、お金を払いながらもありがとうと感謝してもらえるというね、そういうこの仕事人になろうと思ったらですね、やっぱり客にさすがと言わせなきゃならないと。客にさすがと言わせないようでは堂々と金はとれんというのがですね、この社会で仕事をしていく場合の、プロとしても一応の常識みたいなものですね。だからある意味ですが、全社員がやはり仕事をしていく上はお客さんにさすがと言わせる、そういうこの仕事ができる人間になろうということは、これはもう入社当時からですね、この仕事の目標として、やはり全社員が常に心に持っていなければならない職業人としての自覚、目標という風にですね、言うことができると思います。やはりさすがと言わせて初めてプロ。さすがと言われないような半端な力でですね、金をとろうなんて話はおこがましい話。仕事っていうものの仕方において考えなければならないことであって、やはりこう自信を持ってですね、誇り高い仕事をしていこうと思ったら、やはり素人であるお客さんにさすがと言われて初めて堂々と金がもらえるという、やはりこの意識はなくてはならないですね、大事なものであります。そういう結果として金が入ってくると、だからお金っていうのはやっぱり、仕事というものが社会の中で行われていく場合にですね、実際に第2番目の目標というかね、後から金がついてくるのであって、初めから金が入ってくるんじゃないと。まず仕事をしてから金が入ってくると。その仕方ってものが、お客さんに喜んでもらえて、初めて客は金を払ってくれるもんだと。だからお金を目的に仕事をしたんでは、人との関係性、人と関わりながら仕事をしていくという仕方においては本末転倒であり、優先順位が違うということをちゃんと分からなければならないと。まぁとにかく仕事というものは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間になるために仕事はするものだと、それができれば必ず金は入ってくる。そういう順序というものがですね、仕事にはあるということなんですね。ということは、何のために仕事をするんですか、と問われたらお金のためではない、自分を本物の人間に鍛え上げるために、本物の人間に成長させるために我々は仕事というものをしているんだ、仕事をしていなかったら人間は本物にはならん。それほどの自覚っていうものが職業人には必要であります。なんで仕事をしないと社会人として本物にはならないのか。**

**＜職業観・重要なことその①　謙虚さ＞**

**仕事をするということが人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った人間をつくるといういうですね、そういう働きをしているということなんですけども、仕事をしているとどういう風にして人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性がつくられていくのかということなんですけどね、まず仕事において成功して、仕事において客に納得してもらって、感謝してもらえるというですね、そういう仕事をしていくためにはですね、基本的に三つの条件というものが出てきます。まず第1番目に大事なことは、謙虚さですね。やはり傲慢**

**な態度、傲慢な目つき、傲慢な表情、傲慢な物言いというのは、一番これは人間として嫌われるタイプであります。人間というのは基本的に不完全と言われている訳で、どんな完璧な仕事をしようと思っても、なかなか完璧にはいかないで、どこか足りないところ、欠けているところというのは出てきてしまうのがですね、仕事をする上で避けがたい宿命です。どんな技術・能力を持っていても自分がやったことは完璧であって、絶対批判なんかさせへんぞ、とそういう気持ちがあったとしても、やはり人間のすることはどこかに欠けているところがあるというね、問題点や短所・欠点があることを忘れないようにしないと、ついつい傲慢な態度で客に接してしまうことがついついある訳であります。以前、三菱自動車なんかでですね、客からクレームが来た時に、三菱自動車がですね、我々の技術には全く問題がないと、不都合が生じたのはその車を使うお客さん側の使い方に問題がある、我々には問題がないとつっぱねたんですね。これがもうたちまち大騒ぎになって、客を馬鹿にしているというね、まぁそういうことで、本当に潰れそうな状況になってしまった。そこで全社的に反省しちゃったりなんかして、どういう風に反省したかというと、使い方に問題があるにはあるんだろうけど、やっぱり技術者としてはね、どんな使い方をされても全く問題が起こらないようなね、そういう強固なですね、そういうものを提供するのが技術者として大事なのであって、使い方が悪いと具合が悪くなるようなそんな半端なものを作っとったらいかんやないかという、そういう反省が全社的におこってきて、そして客がいかなる使い方をしようともですね、大きな問題、不都合な問題が起こらないという、そういう技術を完成させていこうという、そういうことになってようやくこの社会が三菱自動車の反省を許して、再び現在、ようやく正常な会社に復活した訳であります。技術者の傲慢な態度というものがですね、消費者から総スカンを食ったと、俺たちには問題はない、客が悪いんやというね、これではやっぱり技術者としての自覚というものがですね、疎い、人間のすることには必ず問題点がある、欠陥がある、完全ではない、絶対ではない、そういう自覚があったならばですね、ちょっとでもクレームが来た場合にですね、そういうこともあるかもしれないという反省をして、そしてこの客からの要望・要請・批判というものを甘んじて受けてですね、そしてこのそういうクレームや文句の出ないような、そういう状態の能力を作るために俺はもっともっと頑張ってですね、成長しなければいけない、このまま放っておいたら会社はつぶれる、そういう試金石ができるということになる訳ですね。まぁとにかく人間にとって仕事をするうえで一番大事なことは、謙虚さです。やっぱり傲慢な目つきというのは一番嫌われる、傲慢な態度、傲慢な物言い、パワハラのような会社の中で地位を重ねてきた人が言うことについて問題になる訳ですけども、やっぱり人間としては、職業人としては恥ずかしい姿であります。傲慢さほど恐ろしいものはない。傲慢さほど嫌われるものはない。傲慢さほど醜いものはない。傲慢になった時、人間は人間であることを根底から失格するのです。人間じゃないんです。人間は不完全だからどんなに完璧にしてもどこかに問題点、欠けているところがあるのが当然であって、全く問題はないと、そういう気持ちになった時にどうしても傲慢さが出てきてしまって、慢心が出てきて、自分には責任がないと言って、何か問題があったら責任転嫁して人を責めるような、そういう醜い人間になってしまう訳であります。とにかく仕事をしていく上で何かしら注意をされたり、叱られたり、批判されたり、クレームを受けたりした場合、それはやはり謙虚に甘んじて、そういう問題が生じないようにさらに努力をし、技術においてももっと高度な技術を発展させていかなければならない。そういう思いになることがプロとしての仕事、社会の中で仕事をしていく上で大事なことであって、批判を許さない、人から責められることを嫌うというよう傲慢な態度というのは、これはもう職業人として決してあってはならないですね、最も大きな欠陥であります。とにかく謙虚さのない人間は、成功することはない。**

**＜職業観・重要なことその②　成長意欲＞**

**2番目に大事なことはですね、成長意欲ですね。人間としてもっともっと成長したい。人間としての成長は、能力の成長と人間性の成長との両面の成長がある訳なんですよね。本当にお客さんに喜んでもらえるような能力と人間性を作っていこうと思ったら、やはり机上の空論としての、どうしたらお客さんは喜んでくれるんだろうか、あるお客さんは自分のやり方で喜んでくれても他のお客さんは自分のやり方では喜んでくれないということも必ずありますからね。人によってはやっぱり喜びの度合いや、どういうことで喜ぶのかは違ってきますから、実際問題、仕事をやってみないとわからないというのが現実ですね。仕事の世界であります。どうしたらお客さんは喜んでくれるんだろう、どうしたらお客さんが納得してくれる人間性になれるんだろう、人間としてもっともっと成長したい、人間性においても成長しなきゃならない、どう成長すればいいんだというのをですね、本当にちゃんとわかろうとするなら仕事せんとバーナードと申しましょうかね、仕事をせんと分からんのです。せんとバーナードというのはこれはギャグでですね、つまんないおやじギャグですが、私も今年で76歳になりましたのでね、おじいちゃんギャグでですね、仕事をせんとバーナードと言って笑ってもらおうと思っているので、笑ってもらわないとなんか肩透かしをくらったような気持ちになって、ちょっとこう気分が乗ってこないんで。まぁ、とにかくどういう風にすれば本当に客に満足し納得してもらうことができるだろうかということはやってみないと分からないということですよね。ということは仕事というものは結果が勝負なんです。結果が出るまで本当にそのお客さんが満足し、納得し、喜んでくれたという証拠が出てくるまで何回も何回も繰り返し繰り返し、ああしてみたらどうだろう、こうしてみたらどうだろうといって何回も繰り返し繰り返し努力して、ようやくそのお客さんが喜んでくれたという結果が出て、初めてその仕事は実力という風に言われる段階に入る訳で、それまでは試みというか色々やってみるというか修行の段階なんですよね。お客さんの態度や物言いに、満足に結果が出て初めて、俺も結果が出せる一人前の自立したプロとしての職業人になれたというね、自信がだんだんとついてくるという訳であります。だから仕事というのはやっぱり、10年くらい続けないとですね、いろんなことを体験することはできないんです。4,5年で辞めてしまうようでは、半端な状態で、どこへ行っても役に立たんと。やっぱり10年やって一人前というのはどんな職業でもよく言われていることであります。10年くらいやっていろんなお客さんを知らないと、本当に社会においてどんな人にも満足を与えることができる、結果が出せる、そういうこの職業人にはなれない、さすがと言われる職業人にはなれない。だから10年くらいやらんと本物にはならんという風にですね、考えておかないとならないと思います。まぁとにかく仕事で成功しようと思ったら、まず謙虚さがないと成功できない、また人間としてもっともっと成長したいと思ったら意欲がないと成長できない、成功もしない。これでいいわと思った瞬間に、その人間はもういらん人間ですね、もう役に立たん。会社を発展させることはできないし、成長意欲がなくなってしまったら、だんだん仕事自体がつらくなってきてね、結果としては不平不満を言って辞めてしまう。どこまでも成長意欲があってですね、高度な力を身に付けたい、もっともっと厳密な仕事ができる人間になりたいという、そういう気持ちがないとですね、仕事というものは続きませんし、仕事をしながら自分が成長するということはありません。仕事をしている限りは成長意欲というものを持ち続けていることが大事であって、現実というものは常に動いていますし、同業他社と常に競争の関係にありますから、ちょっとでも気を抜いたら同業他社に抜かれてしまって、競争に負けてしまうということになってしまいますから、本当は一瞬たりとも気が抜けないというのがプロの職場の現実だと思います。そういう意味で何らかの点でちょっとでも成長している**

**ということが大事である。今日１日生きたら、今日１日生きた証というものが成長の中になきゃおかしいと、今年1年生きたら、今年1年生きたなりのですね、成長の証というものを確認しながらですね、それを毎年毎年積み重ねていくというのがプロの仕事なんですよね。確実にそういう風にして毎年毎年、去年まではこれができなかったけど今年はこれができるようになったというね、去年まではこういう人間関係で悩んでいたけど、今年はこういう問題が起こってもちゃんと人間関係を修復して、ちゃんと悩まずにやっていけるようになったよねと、そういうこの成長がですね、1年1年ちゃんと確認されてですね、こう積み重ねられていくと、この1年で俺はこんなに成長したなぁと自覚できるようになってくるんですね。まぁとにかくそういうことで成長意欲のない人間というのは、これはもう職業人としては失格であります。とにかく職業人であり続ける限り成長することが大事であって、でないと会社も発展しません。成長意欲のない人間は絶対に仕事で成功しません。**

**＜職業観・重要なことその③　人間関係＞**

**最後に三つ目は何なのかというと、職業は社会において成り立つものでありますから、社会というのはたくさんの人と関わっていく、たくさんの人と関わりながら仕事をしていくというものなので、社会の中で生きようと思ったら人間関係というものをさばいていく力が要求されてくる訳であります。いろんな考え方の人がいる、いろんな価値観の人がいる、いろんな要求を持った人がいてですね、本当にこう人さまざま、そういう人たちと生きていかなければならない。そういう意味では社会性というかね、誰とでも付き合っていける人間性の豊かさというものがね、職業人においては求められてくると。特に会社の中でも地位が上がって部下が増えてくれば、いろんな性格の人を率いて統率して仕事していかなきゃなりませんから、こいつとは合わんというようなことを言っていたら、仕事にならんというかですね、仕事の能率が落ちてしまってですね、ちゃんとした仕事ができませんから、誰とでも心を合わせてちゃんと付き合っていける人間性の大きさですね、そういうものが求められてくると。社会は人間関係で成り立っていますから、そういう意味では相手に対する思いやりですとか心遣いとかですね、そういうことをしていかないとお客さんを満足させることはできませんし、社内で同僚と共に仕事をしていくというのも心遣いや思いやりというのもある程度要求されてきます。最近は人間関係が苦手と、パソコンが使えたらいいやとか、携帯でゲームばかりしているとか、そういう風な感じで直接の人間関係というものが鍛えられていないので、人間関係が増えて、あんまりちゃんとした心遣いとか思いやりなんていうことは苦手だという人は案外多いものなんですけど、それではやっぱりですね、社会の中で人間関係というものを持って生きて行くとすれば、非常に問題のあることだと思います。やっぱり思いやりや心遣い、一言で言えば愛というものなんですけど、他人に対する思いやり、心遣いとというものができて初めて人間関係というものがですね、うまくいく訳ですよね。人間関係で悩んでいる人は、本当に多いです。現実的には考え方が合わないとか、価値観が違うからあの人とは仕事ができないとか、性格が合わないとか、問題点が出てくるということがあります。社内では人間関係をうまくやっていく、人間関係を作っていく力がないと、この社会で仕事をしていくことは辛くなりますし、対お客さんとの対応においても人間関係のトラブルが出てくると仕事もうまくいかなくなる。そういう意味ではやはり仕事において成功する人っていうのは、素晴**

**らしい人間関係をたくさんつくるという能力がどうしても求められてくる。俗にいう愛の力と言うんですけれども、この愛というものは、人間関係の力と呼べるもので、人間関係は全て愛によって成り立っている、人間関係の問題を処理していくためには、できたらやはりこの愛の力を成長させなければならない、まだまだ現実社会ではこの愛というのが感情的なものであり、情緒的なものであって、愛は自然発生的なものだという風な考え方をしている人が多くて、能力と考えて、愛の能力を成長させようという気持ちはまったくまだないんですよね。だけど今多くの人が愛に悩んでいる、人間関係で悩んでいる、これは個人的な問題ではなくて全世界的に人倫の崩壊といって、人間関係がずたずたに切り裂かれていってしまっているのが現実の世界だと言われている。これが離婚の激増とか、幼児の虐待とか、高齢者の虐待とか、宗教戦争、民族戦争、人間同士のいがみ合い、対立といったもので人類は皆苦しんでいる。愛の素晴らしさをわかっているけど皆、愛に悩んでいる、愛に苦しんでいる。親子の関係でも悩んでいる人はいっぱいいますよね。すべての人が何らかの人間関係で悩んでいるというのが現実ですから、この問題を乗り越えていかなければ、人間は幸せにはならないし、そもそもこの問題を処理して乗り越えていく力をつけていかないと、仕事もうまくいかんということにね、なってくる訳ですよね。そういう意味ではこの愛というものをね、いつまでも情緒、感情、本能、情熱というね、そういう自然発生的な状況のままで放ったらかしにしておいたらいかんと、愛というものを能力と考えて、愛の能力を成長させていくことによって愛に実力をつくって、どんな人間関係でも自分の力でさばいていく、乗り越えていける力を作っていかないとですね、人間関係の中で成り立つ社会の中で、仕事における成功という結果を出すことは難しいんじゃないかという風に考えられます。是非そういう意味で愛というものを是非能力と考えてほしいと、能力と言ったら理性という風にね、考えている人は多いんですけど、だけど人間関係の問題というのは、これは理性ではなんともならん問題なんですよね。心遣いとか思いやりとかそういうものが関係してきますので、理屈を超えた愛の能力なしには人間関係という問題を乗り越えていくことはできません。そういう意味では仕事で成功するためには愛の能力を磨いて、愛の実力を作っていくということをすれば、離婚の激増も止まるであろうし、幼児の虐待も防げるであろうし、高齢者への虐待も防げるであろう、いろんなですね人間同士の人間関係のもつれ、悩み苦しみというものを乗り越えていく力を持つことができると言える訳ですね。ではこの人間関係の破綻というか、人倫の崩壊ということを乗り越えてですね、いろんな人間と仲良くやっていく力というものをですね、作っていくということを考えていくと、どういうことが必要になってくるか、今はとにかくあれですね、価値観が違ったら一緒に仕事ができるはずがない、そうだよねって言ってますし、考え方が違ったら一緒にやっていきにくい、だから考え方が違うやつは排除するという感じでですね、仕事は進んでいるんですね。同じ考え方の人間と一緒にやっていったらいいというね、そういう思いが非常に強い。だけど同じ考え方の人としか一緒にやっていけない、同じ価値観の人としか一緒にやっていけないという状態というのは、人間が理性に支配されているがためにそういうことになってきます。理性は違う考え方を排除するから、また理性は確率性を追求するから同じじゃないといけないとなってくるから、これでは違う考え方の人とはやっていけないという風になる。理性的な考え方の人というのは、自分と同じ考え方の人としか生きていけないという人なんですよね。だけど理性的な人というのは一部分じゃなくて、今は全人類が理性的な人なんですよ。今は全人類が理性の奴隷なんですよ。ほとんどの人は考え方が違ったら一緒にやっていけないと、そういう人間性になってしまっているんですね。だから宗教戦争は起こるし、民族戦争が起こる訳ですね。だけど自分と一緒の考え方の人としかやっていけないという人間は、愛で考えたらね、自分と一緒の考え方の人としかやっていけないという人は、自分しか愛せない人間なんですよ。自分のことしか**

**認められない人間で、自分と違うものは否定する人間なんですよ。自分と違う考え方や価値観の人は敵だと意識し一緒にやっていけないと、同じ考え方しか認めない、自分の考え方しか許せないという人は、自分と違う考え方の人をなくそうとする、どうにか説得して自分と同じ考え方に導こうとする、自分と違うものを抹殺しようとする、そういう恐ろしい意識を持ってしまっている訳です。とにかくまず考えてみてもらいたいのは、自分と同じ考えの人としかやっていけないと考えている人は、自分しか愛せない人間なんだ、自分しか愛せないような愛は、偽物の愛だ。自分しか愛せないような愛でどうして子孫を残せようか。愛というのは本来、子孫反映の欲求から湧いてきたものであって、愛は男が女を愛し、女が男を愛するという構造が基本となってできている訳です。愛というのは自分と違うものを愛するというところにですね、愛の本質がある、愛の原点がある。そのことを考えたならば、自分のことしか愛せないのは、これは理性によって歪められた愛であって、真実の愛ではない。仕事で成功しようと思ったら、違う考え方の人とも一緒にやっていかなくてはいけないし、価値観が違う人とも一緒にやっていかなくてはいけない。そうしていろんな人を統率していくという力を作っていかなければならない。ということを考えたら、我々は愛というものを理性の支配から解き放って、本当の理性を超えた愛の能力というものを作っていかないと、人間関係を素晴らしいものにしていくのは難しいということがわかってきます。本当に仕事において成功したいと思ったら、我々は愛の実力を作るという、そういう発想でこれから愛というものを考えていかなければならないということになってくる訳ですね。まぁとにかく自分と同じ考え方の人と一緒にやっていけない、自分と価値観の人としかやっていけないという人は、自分のことしか認められない、自分のことしか許せない、自分しか愛せないという愛は偽物の愛だ。このことをですね、ちゃんとわかってもらって、そして我々は偽物の愛と離れてですね、自分と違う考え方や価値観や、自分と違う民族でもですね、排除しないで仲良くやっていこうと思うという気持ちをですね、やはり作っていかないとこれからの時代、これから個性の時代と言われていますからね、考え方も価値観も宗教も違ってもいいという時代になってくる訳ですので、お互い個性を認め合いながら許し合いながら、理屈を超えた生き方ができるという状態にもっていかなければならないという訳ですね。**

**＜職業観・重要なことその③　人間関係／考え方の違う人間と一緒にやっていく方法＞**

**ではどうしたら考え方の違う人間と一緒にやっていけるのかというと、またちゃんと考えていかないと愛の実力はついてきません。どうするかということですけども、考え方が違うということはどういうことなのかということなんですけども、考え方というものは生まれてから後天的に作られるものであります。生まれながらにして考え方が違うと言ってむかついて生まれてくる子どもはいませんからね。生まれたときは絶対的な信頼を持って一点の曇りもない状態でですね、本当に清らかな瞳と清らかな心をもって皆生まれてきます。生まれてから後に考え方が違ってきたり、価値観が違ってきます。じゃあ後天的に一体どういうことが原因で考え方や価値観が違ってくるのかということですが、その原因は5つしかないんです。まず、体験が違ったら考え方が違う。経験が違ったら考え方が違う。持っている知識・情報が違ったら考え方や価値観も違う、物事も解釈がプラスかマイナスかでその人の考え方が違う。また、人生において出合いというものは色々あってですね、どんな事件と出遭ったか、どんな事故に出会ったか、どんな犯罪と出遭ったか、どんな災害に出遭ったか、どういう本に出逢ったか、どういう人と出逢ったか、そういう出合いの違いによっても考え方や価値観はガラッと違ってきます。とにかく考え方や価値観が違**

**ってくるという原因は、この五つしかないんです。ということは、考え方が違うから嫌になるんだ、敵だということは、自分にない体験を相手がしている、自分とは違う知識を持っているということなんですよね。対立の原因というのは相手と自分との体験が違う、だから考え方が違ってくる。敵というものは自分にないものを相手が持っているということ。だから同じ考え方の人間というのは、だいたい体験や知識も一緒なんですよね。よく似ていて考え方が合っているんですよね。同じ考え方の人間と一緒にいたら楽しいし、愉快で気楽であまり苦労もない。ついつい一緒にいるということになってしまうんだけども、同じ考え方の人と一緒にいてもどんだけ付き合っても成長はしないんですよね。成長をしようと思ったら誰かから学ぼうとしないと、本人は成長しません。考え方が違うということは俺にはない何かを相手が持っているんだということですからね、だから考え方の違う人というのは、結局、薬局、郵便局と申しましょうかね、自分にないもの、自分が成長するために学ばなければならないものをもっている人間が、今俺の目の前にいるんだということが対立の現象なんだと、そういう風に対立を理解することによって、我々は敵を敵対心を持って見るのではなく、今俺はあいつから学ばないといけないものがあるんだという気持ちでね、相手に対峙するということができるようになってくる。これはものすごく大きな成長であります。これだけで相当その人間は大きくなっています。嫌な奴だという目で見ているのと違って、俺はこいつから何かを学ばなければいけない、俺にはないものを相手は持っているんだなと、いったいあいつは俺にはない何を持っているんだろうと、相手を見る目が違ってきますよ。この自分が相手を見る目の色の変化がですね、相手の心に感応して、相手のこちらに対する態度も変えてくれるんです。人間関係の93%は目で決まるといいますからね。人間関係というのはどういう目で人を見るかによって決まります。批判的な目で見たりあるいは見下すような目で見たり、嫌な奴だといった目で見ていれば人間関係は悪くなります。相手を尊敬するような目で見たり、好きだといったような目で見たりすれば人間関係は良くなっていきます。もっともっと人間関係を鍛えるなら、我々は目をもっと鍛える、目を成長させる、ということをする必要があります。人間関係は目が勝負だ。どういう目で人を見るかによって人間関係が決まる。その目を鍛えるために我々は敵というのは実は俺とは違う体験をしているし、俺にはない知識を持っているし、俺にはない様々な体験をもっているので、俺とは違う考え方になっているんだと。考え方が違うということは確かに嫌なことだけど、だけどよく考えてみたら人間が成長しようと思ったら、やっぱり自分にないものを学ばないかん、敵と言ってもあいつは俺とは違う体験をしているんだから、もしあいつの体験を俺が持ったとしたら、俺の考え方はどう変わるかなという風に思ったり、ああこういう体験をしているからあいつはこう考えるんだということがわかってくるとですね、考え方が違ってもその考え方の根拠・理由がわかってくるのでね、相手の気持ちがわかる訳ですね。まず対立という状況が出てきたならば、いかなる対立であろうとも、まず対立ということは、自分にはない何かを相手が持っているということを教えてくれる現象なんだ、対立という現象は、自分が学ばなければならない人間が今俺の目の前におるということを教えてくれる現象なんだという風に解釈して、自分の気持ちとしては、一体この対立から、あいつから俺は何を学んだらいいのか俺は知りたい、一体あいつは俺にない何を持っているんだということを知りたい。そういう認識欲を持ってですね、敵に対峙するというね、そういう気持ちがですね、まず人間関係を処理する場合には必要になってくる訳であります。相手がそういう体験があったらこういう風に考えるのも無理はないわなぁとわかってくると、考え方が違っても相手の考えを了解するというか、わかってあげることができるんですね。お互いに学び合えば、だんだんと考え方が近づいてくることもあるし、自分の人間性の幅も広がってきます。考え方が違っても仲良くやっていけるというそういう関係になれます。結果として考え方が違っても価値観が違っても一**

**緒に仕事ができるパートナーシップが組めるというね、人間はそういう状態に成長していけるものなんです。パートナーというのはですね、違うからパートナーになれるので、同じだったら仲間なんです。仲間はどんだけ付き合っても成長しない。パートナーというのはお互いに助け合う関係性なんですね。どんな人間でも不完全ですから、自分の考え方を補うのに必要なんです。どんな人の考え方にも偏りがあり、欠けているところがあるから、相手と協力すれば完成に近づけます。お互いに教え合い、学び合わなければならない。本来会社というところはですよ、会社の一人一人が何らかのエキスパートになって、彼らがお互いに協力し合って完成度の高い仕事をしていくっていうのが会社として理想の姿なんです。会社の人間関係は原理的にいうとパートナーシップというものが大事なんです。だからいろんな考え方の人がいて、いろんな価値観の人がいて、そしてパートナーとなって助け合えるというのが会社という組織としての意味であります。だから決して考え方が違っても敵だと思ってはいけない。この考え方の違う人と一緒に生きるという言葉を難しい言葉で言うと、矛盾を生きる力と言います。理性は矛盾を排除しますが、愛は矛盾を生かす力であって、愛ならば考え方が違っても一緒にやっていけるという力が出てきます。だから愛は矛盾を生きる力だ。これから人類が本当に平和を求めるならば、この理性ではできない矛盾を生きる力、この愛の力を成長させていく以外に、真の平和というものを家庭に、職場に実現することはできません。そしてこの矛盾を生きる力が、また仕事において人間を成長させてくれる力なんですよね。人間関係がうまく作れないようでは会社の発展も止まってしまいます。いろんな人と仲良く付き合っていけるというですね、そういう力を作っていくことが仕事において成功するために欠くことのできない大事な原理です。ということは仕事というものは人間に謙虚さを作ってくれる、又人間としての成長意欲を持たなければいけないし、素晴らしい人間関係をたくさん作る力を養っていかなければいけません。この3つは仕事において成長しようと思ったら欠くことのできない原理なんですよ。だけどこの謙虚さと成長意欲と愛は、人間の格を作る原理であってね、人間は犬や猫ではないというね、謙虚さと成長意欲と愛は、人間を作るんですよ、本当に仕事で成功しようと思ったら、人格を作っていかないと仕事においては成功できない、仕事で成功しようと思ったら、ひとりでに人格はできてくる。だから仕事というものは、人間に人間の格を作くる活動なんだという風にも言うことができる訳であります。仕事というものは人間に人間の格を作ってくれる、そういう活動なんだ、だから我々は仕事を通してですね、自分を本物の人間に成長させていく、そういう目標をもって我々は仕事というものに取り組む必要があるということです。本当に仕事において成長しようと思ったら、人間の格を持たざるを得ないということ。仕事を通して、人間の格を獲得して初めて実力という身についたものになる。仕事をしないで人格、人格と言っていくら論文を読んでもそれは観念的な勉強だけだ。本当に人格というものが実力となって、肉体化され本当に自分のものになるためには仕事をセントバーナードね、肉体を動かして仕事をすることによって人格が身につく、肉化する、そこで何のために仕事をするんですかと言ったら、金のためではない、自分を本物の人間にするために仕事をするんだ、仕事を成功させようと思ったらひとりでに人間の格が必要になってくる、人間の格ができたら必然的にあとから必ず金が入ってくる。これが仕事において成功するためのですね、大事な基本原理だという風に言うことができる訳ですね。**

**さきほどは職業観ということで、仕事をしていく上でどういう風な自覚が大事なのかということをお話ししました。とにかく仕事というものはこの単純にお金を目的にするというね、そういう気持ちを持っていたのでは人間性が醜くなる、人間として尊敬されるような人間性を獲得することはできないです。お金は大事だけど、お金は二の次に入ってくるものであって、まず仕事をす**

**る上で我々が意識しなければならないものは自分自身、仕事を通して、本物の人間に成長させていくということを考えなければならない。社会人として本物というのは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性をもった人を社会人として本物と言えるものである。そういう人に喜んでもらえるような仕事ができる能力と人間性をもった本物の人間になれば、その成長の度合いに応じて金は否が応にもわんさか入ってくるというね、そういうことになってくるんだと。決してお金を目的にしなくても自分自身を本物の人間に成長させていこうという想いを持ってですね、仕事をしておれば、勝手に金が入ってくるという構造に経済社会はなっているんだということをですね、我々は忘れてはならないと思います。その仕事をすることによってですね、確実に成功するような仕事をすれば、人間の格というものが整ってくる。謙虚さと成長意欲と愛を持った人間になれるということなんですよね。その状態を人間の格を持ったといえる訳で、そういうことから人格者ということが言える。人格者っていうのは一応この悪いことはしない、良いことをする、社会の取り決めをちゃんと守っていける、そういうこの常識的なですね、人間の格を持った人を人格者と言う訳ですね。ただ人格だけでは仕事はできないので、同時に人格だけではなく能力を磨くということもですね、やっていかなければならない。人格と能力を磨いていくことをすることによって、人間として本物になっていくことができる訳です。そういう意味では本物というのは人格を超えた人間の目標であると。本物というのは偽物と対をなす言葉ですけども、この本物っていうのは言っていることとやっていることがぴったり一致している。偽物は言っていることとやっていることが違うということです。そういう意味では、本物というのは言っていることが身についているという本物の人間という風にですね、言うことができる訳であります。だけど、経済界で求められている人間のあり方っていうのは、往々にして人材という言葉が使われてですね、人材を求める、人材として評価されるという言葉でよく言われている訳ですけども、人材というのはこれは、ある意味でお金を儲けるための能力において優れている人を人材と言っている訳であって、人材という言葉は、材料の材を書こうと財産の財を書こうと、人間がお金のための手段として使われるというそういう状態にあるということが人材という言葉の意味であります。まぁそういうこともあってこの学校も、それからこの社内においても人材教育という言葉をよく言われてですね。人材教育をしている。人材教育というのは仕事をするための能力を授けて、そしてお金を儲けるための手段・材料としてその人間を使う、その能力に優れた人間は人材として立派と言われることになる訳です。だけどやっぱり人間っていうのは、金儲けの手段として使われるものであってはならない。人間そのものがですね、成長するということが一番大事なことであって、人間は使い捨てされるような、役に立たなければ捨てられるような、そういうことであってはならない。そういう意味では我々は単に人材において能力において優れた人間になるだけではなく、やはり人間性においても優れた立派な人間になるということを目標にして、仕事をしていかなければなりません。人間性における成長ということを考えるとどういう課題が生まれてくるかということなんですけども、人間には人格というものがあって、人格を持てばそれで終わるという訳ではないと。人格っていうものにはさらにより高度な目標があってですね、人格が高いとか、人格が深いとか、人格が大きいとか、そういう目標というものがさらに人間には出てくる訳であります。そういう人格の高さや深さや大きさというものは仕事を通して追求していってですね、そしてこの人間性において人に感動を与えるようなそういう状態になってくる訳なんですね。人格者を超えた、本物を超えた人物と言われるような段階に到達することができます。この人間性が人に感動を与えるようになってくるためには、人格の高さ、人格の深さ、人格の大きさっていうものが求められてくる。こういうものが身についてくることによって、やはり多くの人からさすがプロですね、と感動を呼ぶ仕事ができるようになってくる**

**訳であります。こういうこともプロとして、成長の目標として、ちゃんと持っていて、だた人間の格を持てばいいというだけではなくて、さらに人間の格を磨く、人格を磨くということも職業人として成長の目標として掲げているということがですね、大事になってくる訳ですね。そういうことも含めてですね、やはり全社員の仕事の目標としてですね、多くの消費者からさすがにプロですねと言ってもらえるような、そういう状態・水準・姿を常に目標として仕事をするということをしていないと本当の職業人としての魅力・誇りというものを手に入れることはできないんじゃないかと思います。単に人格だけではだめ、人材だけではだめ、だた人間という本物の状態というだけではだめ。さらにそれを超えて人間としての魅力をですね、人に感動を与えることができる要因を自分の中で作っていこうと思ったら、この人格の高さ、深さ、大きさっていうものも意識しながら我々は仕事をしていくということが大事になってくる訳ですね。**

**＜職業観・人格の高さについて＞**

**ではこの人格の高さというものはどういうものなのかということなんですけども、違う言葉で言ったら高貴なる精神という人格の高さということが表現されます。高貴なる精神とはどういうことかと言うと、どこまでも高度なものを求めたい、どこまでも厳密なものを追求したい、こういう欲求が高貴なる精神と言われるものであり、どこまでも真なるものを追求したい、どこまでも善なるものを追求したい、どこまでも美しいものを求めていきたい、この精神を高貴なる精神と呼ぶんですね。仕事の質というものを成長させていこうと思ったら、どうしても高貴なる精神というものが求められてくる訳であります。量の時代から質の時代へと発展していく訳です。会社の質を向上させようと思ったら、社員の質を向上させなければならない。社員の質を仕事の仕方において向上させようと思ったら、全社員がどこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていこう、どこまでも真なるもの、より善なるもの、どこまでも美しいものを求めたいというそういう気持ちを持ってですね、仕事してお客さんと関わるという状態にしていかないと会社の質は向上していかない。どこまでも真なるもの、より善なるもの、どこまでも美しいものを求めたいというこの努力がですね、人間として品格を作り出すと言われています。全社員の品格が向上するということは、社風が良くなり、会社の品格が良くなっていき、会社全体の質というものが同業他社を追い抜いて、本当に消費者から素晴らしいと言ってもらえるような会社になると思います。全社員がより高度なものを、より厳密なものをと考えて仕事をしてくれたらどれほどの成果が見られるか。人格の高さを形成する高貴なる精神というものがいかに仕事において、職場において必要なことかよくわかってくるはずであります。**

**＜職業観・人格の深さについて＞**

**人格の深さというものがどういうものかと言いますと、この深いというのはどういうことなのか、深さというのはどういうことなのか。国語辞典で深さと引くと、浅くないことと書いてありますが、人間の深さについてちゃんと言い当てている言葉がなかなか見つからないんですよ。私なりに考えた結論として、深さとは物事のより根源的で、より本質的な意味や価値を感じとる力が深さなんだという風になりました。だから人の言うことを聞いて、なんて深いことを言うんだという風に感じた時っていうのはですね、自分よりも相手の方が物事のより本質的で、より根源**

**的な意味や価値について話した時に、深いことを言うな〜と感じるんですね。そういう人間になるためにどんな努力をすべきかなのか。深さっていうものを作っていくためには、新しい気づきがないと深いことが言える人間にはならないんです。そのためには命の痛みを感じるような体験が必要です。これは今自分の持っている力でできないことでもできるようにしようとするような限界に挑戦するような、不可能を可能にするようなそういう努力の仕方、仕事の仕方をしていると、そうすると今自分の持っている力でできないようなことができるようになった時、新しい気づきの気持ちが湧いてきます。気づきは湧いてくるものですから、気づきが湧いてきたり、知恵が湧いてきたり、潜在能力が湧いてきたりするという、その構造が人間性の深さをつくってくれる構造なんですね。そうしていくうちに人は深いことが言えるという風になる訳であります。実際問題、命の痛みを感じるような努力、体験というのはですね、苦しいからついつい避けて通りがちです。しかし、仕事というものはそういうこの、今自分の持っている力で仕事をしないようでは、会社は発展しませんから、今自分のできないことでもやろうとする、不可能を可能とする、そういう仕事の仕方をしていかないといけませんし、限界への挑戦という今できないことをできるようにしようということもですね、仕事においては必ずやっていかないといけないことになります。そういうことをやっていると、自然と命から気づきが湧いてくる、知恵が湧いてくる、そういう構造が命にできまして、だんだんと深いことが言える人間に成長していくことができます。深いことを言える状態になるためには、ある意味で悩まなければならないし、いろいろな問題にぶつかって苦しまなければならない。そういうさまざまな人生においての悩みや苦しみを乗り越えていくことによって、人間は能力においても人間性においても成長するということがあって、そういうことからいろんな気づきというものを持つことができて、深いことが言える、深いことがわかるという魅力が出てくることになる訳であります。人生におけるさまざまな悩みや苦しみというものがですね、実際自分自身にですね、深さというものを作ってくれる働きをしてるんだということを我々は意識しながら、つらい苦しいことがあってもそれを乗り越えていくという風なね、そういう生き方をしなければならない。つらい苦しいということが現実的には嫌なものだが、その中でしか成長しないものがある。それが人間性の深さというものなんだ。そういうことを考えながら我々は日常のつらい仕事にも耐えて、それをこう諦めずに乗り越えていくということをですね、する必要がある訳であります。**

**＜職業観・人格の大きさについて＞**

**大きいということはどういうことかというと、これは器が大きいとか、度量が大きいとか、包容力があるとか、統率力があるとか、そういうことをもって大きいと表現します。大きな人間になろうと思ったら、器の大きさを作るということもですね、仕事上の人間関係の中で考えていかなければいけないし、また、度量の大きな人間になるというね、そういうことも意識していかなければならないし、包容力のある人間になろうということもですね、大事な課題になってきますし、また、会社における地位が上がってくれば多くの部下を率いて仕事をしていかなければなりませんから、そういう意味では統率力という力もつけていかなければなりません。これもやはり実際問題、組織の中でですね、いろんな問題にぶつかって努力をしないとなかなか作られるものではありません。まだまだ現代の学校教育においても、また職場における職場教育においても人間性において魅力を作るというですね、人格の高さを作り、深さを作り、大きさを作るという目標が全くですね、現実に意識されておりません。そういう意味ではこれからの質の時代において**

**ですね、会社を発展させていくためにはですね、どうしても新たなる成長の目標というものをですね、掲げていく必要があります。単に人間の格を持つだけではなくて、人格を磨くということをテーマにしていただいて、人格の高さ、深さ、大きさというものを仕事を通して実践的に獲得していくということをやってもらって、そしてできることならば大人物と呼ばれるものを成長の目標として持ってもらいたいと。大人物というのは言葉でいうと清濁併せ呑むという言い方をします。人格者というのは、善人であることを望み、倫理高徳を守って、常識的な生き方ができるという状態という言い方ができます。単に人格者だけではこの弱肉強食利害打算が支配するですね、この世界を本当に力強く生き抜いていくというはなかなか難しいと。そういう意味では人格者を超えて、さらに本物を超えてですね、そして人材を超えて人物になるというね、そういう目標というものを掲げながらですね、仕事っていうものはやっていただきたいという風に願う訳ですね。**

**＜社会観＞**

**最初に申し上げたことですけど、我々は学校を出て社会に出る。だけど社会に出たからといって社会人になる訳ではない。社会人というのは社会に出て人に役に立つような仕事をもって、初めて社会人と呼ばれるのであって、社会に出ても仕事がなかったら社会人とは呼ばれません。人の役に立つ仕事というものを持つことによって、我々は社会人と言われるようになる。社会というのはお互いに役に立ち合うという関係性で作られる社会が社会というものですので、その社会の中で成り立つ職業というものはですね、人の役に立つという働きをしている訳ですから、そういう意味で社会人と言われるためには、人に役に立つ仕事をもって初めて社会人と言われるようになるんだと。まず社会の中で生きる者として求められるのは社会性と言われるものなんですけども、社会性がなかったら、人間とは言えない、人間は社会的な存在と言われて、社会の中でいろんな人と関わってですね、そして社会の秩序というものを、壊さないように生きるというね、そういうことができて初めて社会性があると言われる訳ですね。社会性があるということは性格が違っても仲良くやっていける、考え方が違っても仲良くやっていける、価値観が違っても仲良くやっていける、宗教が違っても仲良くやっていける、民族が違っても仲良くやっていけるということが、社会性があるということなんです。それができないということは社会性がないということ。人間が社会的な存在であるとするならば、社会性がなければ人間性がない、人間性がないってことは人間ではないんだ、という風に考えることができるのであります。だから社会とはなんなのかということを考える上で一番大事なことは、この社会性というものをですね、自分の中でものにしなければ、社会の中で生きる人間としては人間性がないという風に言われるということであります。宗教が違うからと言って戦争を行うようでは社会性がないということなんです。こういうことは現実の世界ではあまり言われないんですよ。宗教が違うから殺しあうというのは、性格が違ったらうまくやっていけないということと同じなんです。これは社会性がないということなんです。社会性というものがあれば、宗教が違うからといって戦争をするということは恥ずかしくてできないということにね、本当はなってくるはずなんです。だけども残念ながら世界は、社会性とは何なのかということをあまり問題にしないっていうか、そういう意識をあまり持っていないですよね。社会性ということをあまり重要視していないので、考え方の違いで対立して勝ち負けを争うようなね、そういったことがこの世界ではまだまだなされておりますし、宗教戦争、民族戦争が起こっているというのが現実な訳です。全人類が社会性というものを真剣に考えたら、宗教が違ったら戦争を起こすということがなくなり、宗教が違ったらどうしたら仲良く**

**やっていけるか考えるはずなんです。それほどまでに人間の生き方というのが、本当に次元が低いというか、まだまだ人間において幼い段階にあるんじゃないかと思います。そもそも宗教の違いはどうして生まれるかかということですが、基本的に人間というのはですね、母なる命を与えられて生きている訳です。だから人間と命というものを見つめてみれば、この命を作ったものと我々との関係性というものがですね、我々の中に内在するという風に言うことができる。いわゆる創造主と被造物というね、そういう関係性が命の中にある。それに目覚めてくると人間は宗教と作ることになる。自分の命というものを作ったものがある、目には見えないけれど自分の命を作ったものがなければ、自分は生まれてこない、我々は作られた命をいただいて生きているんだと。そのへんの構造が宗教というものを生み出す命の内面における構造であります。そういう意味では、いろいろな宗教があるんですけども、元は命を作った母なる宇宙という存在が一個あるだけであって、宗教の違いは風土の違いだけで宗教の違いが出てくる。これは日本語でも風土が違うと方言が出てくる訳ですよね。この風土の違いというものは、その上の文化・文明を決定するという構造があります。だからいろんな宗教があるということは、どういう風土でですね、この超越的存在が意識されるかによって、どういう神さまの名前になりですね、どういう教理が出てくるかが決まる訳であって、宗教の違いというのはただ単に風土が違うということが言われる訳であって、もとはですね、みんな同じ命を作り出した超越的存在というものをですね、意識しているんだという風に言うことができます。そういうなんでいろんな宗教が出てくるのかということをちゃんと考えていくと、風土が違うからと言って対立して殺しあう必要はないんだと。生きている場所の違いというものがですね、いろんな宗教の違いを作り出すだけであって、またいろんな考え方・教理を作り出す訳であって、本来、対立するようなものではない。風土と宗教の関係性がわかってくると、理解できます。社会と言っても会社と組織もやっぱり社会ですので、この組織の中で皆と仲良く信じあって生きていくにはどうしたらいいのかということをね、どうしたらいいか真剣に考えるということが、人間として組織を生きるというね、生き方の基本的な課題になってくる訳であります。よくお父さんお母さんはですね、子どもが言うことを聞かないとむかついてですね、ついつい言うことを聞かそうと思って、虐待してしまうことがよくあります。虐待ほどのことはしないまでも、なんとなく子どもとうまくいかないというか、子どもを扱いにくいといったことで困っていらっしゃる家庭が非常に多いです。そのとき一番大事なことは、子どもというものは親に反抗しなければ成長できないんだというね、命の事実を知っているかどうかなんですよ。子どもの命というものは生まれながらにして、第一反抗期、第二反抗期というものを命にプログラミングされて生まれてきているんです。反抗のない子はその子らしい人生を送れないということなんです。いつまでも親の言うことを聞き、いつまでも先生の言うことを聞き、いつまでも大人の言うことを聞いていたら、その子らしい子にはなれないんですね。だけどみんな人間には個性があって、みんな顔が違いますから、自分らしい生き方をしようと思ったら、この違うということをちゃんと主張していかないと、自分らしい生き方はできません。自分らしくなるために何をするかといえば、親に反抗する、先生の言うことに反抗する、社会のあり方に反抗する、それがその子が自分らしい道を歩む方法なんですね。だから、本当の教育というのは反抗を恐れてはならない。むしろ、反抗してきたら反抗を通してその子の考えや欲求を分かってあげて、その子の考えで生きていけるように協力してあげる。まずその子の欲求を実現できるように協力してあげて助けてあげる、そういう関わり方を親や先生はしていかなければならないという訳であります。だけど反抗しない子は一般的にいい子と言われてですね、反抗する子は悪い子と言われています。だから反抗しないようにと教育されていってしまうんですけど、だけど反抗しない子はいい子だということではなくて、そういう子は困った状態の子なんです。反**

**抗しない子はいい子ではなくて、親にとって都合がいい子ということであって、その子にとって決して良いことではないんです。ですので子どもは反抗しないといい子と言われるんですよ。だけど反抗しないということは、みんな我慢しているということなんですよ。ものすごくストレスがたまっているんですよ。そういう子はどこかでストレスが爆発してしまって、親の前ではいい子の演技をしているけども、外に出たらめちゃくちゃやってるみたいなね。よく教育テレビなんかで、10代の若い子たちが出てきて、大人がその中に一人入って、子どもの気持ちを聞くというような番組がある訳ですけどね、皆んな学校ではいい子を演じているんです。家に帰ったらいい子を演じているんです。会社の中ではいい子を演じているんです。一歩外に出たらいい子を演じることをやめて、自分の勝手放題をしてしまうんです。ストレス発散のために反社会的なことをしてしまうと言っています。平和という問題に関しては、第二次世界対戦が終わったあと、国連にユネスコという機関ができてですね、ユネスコの憲章の言葉が作られてですね、書き出しの言葉には、「戦争は人間の心の中から始まるのである、人間の心の中に平和の砦を築かなければならない」、という言葉からこの憲章の文章が始まるんですよ。これこそまさに我々がこれから、この家庭の平和、社会の平和、世界の平和を考えていく場合の原点になる重要な言葉じゃないかと思うんですよね。本当にこの醜い対立を乗り越えていこうと思ったら、核兵器をなくしたくらいでは対立はなくならない、平和の最後の課題は一人一人の心の中に平和の砦を築くんだと、この平和の砦とは何なのかとそれは社会性という原理ですね。社会性というのは皆と考え方や宗教が違っても生きていけるということが社会性があるというんです。この社会性というのは人間でいうところの愛ということですよね。我々自分自身の問題だけではなくって、これから子どもたちにも本当に平和に仲良く生きていこうと思ったら、自分の心の中に平和の砦を築かなければならない。その平和の砦とは社会性ということなんだよ。社会性とは愛なんだよ。考え方の違う人も仲良く生きていこう、どうしたら仲良く生きていけるんだろうと考える心が愛なんだよと、子どもたちに教えていかないと人類は今よりも素晴らしい未来を作り出すことはできません。本当に社風を一変させてですね、美しい社風にしていこうと思ったら、この会社という組織の中に社会性というものを根付かせて、社員一人一人が自分の心の中に平和の砦を築いて、みんなとどうしたら仲良くやっていけるかなということを常に考えながら、付き合うという社風・風土を作っていく必要があるのではないかと思います。社会とはなんなのかということを考えたら、社会の中で生きるということを考えたら、社会性を身につけること、社会性を持つということが一番大事で、これこそ人間として美しい生き方をするための原点だということを考えなければならない。そして組織というものも、この社会性というものを原理に据えながら運営されていかなければならないという風に思います。もうひとつ社会において忘れてはならないことは、自分の価値は他人が決定するという原則で働いています。他人から評価されなければ一文の価値のない人間です。社会は他人から評価されながら生きているという構造になっている。会社に評価されて雇ってもらって給料がもらえる。会社から評価されなかったら雇ってもらえない、結局生きていけない。自分がどんなに素晴らしい能力を持っていたとしてもですね、他人からお前はすごいと言われなければ一文も価値のない人間だ。我々が社会のために生きていくためには、自分の持っている能力をどうしたら人の役に立てるだろうかということを考えなければならない。よく個性が大事だと言って主張する人がいる訳ですけど、人の役に立たない個性は単なるわがままだと。個性というのは社会の中で初めて価値を持つものであって、社会の中で個性が役に立つということは人の役に立って初めて個性は個性という価値を持つんだということをですね、忘れてはならない。人の役に立たない個性はわがまま身勝手だと、これは社会性がないっていうことなんだと。本当の個性は人の役に立って初めて個性なんだと。だから自分というものをどうすれば皆の役に**

**立たせることができるだろうかということを考えないと、社会の中で生きる値打ちがですね、出てこない。だから社会の中で生きるためには自分の価値は他人が決める構造になっているんだから、人の役に立つ人間になろう、人に必要とされる人間になろう、人の役に立つことが嬉しいというね、そういう気持ちを作っていかなければならない。この気持ちが社会的な意味で愛なんですよね。人に喜んでもらったら自分も嬉しい、これが社会性としての愛ですね。人間は不完全なものであって、他人にいろんな迷惑をかけたりすることがたくさんあります。そういう不完全な人間が社会の中で生きていくために必要な原理っていうのはですね、よく言われることは、感謝と謝罪なんですよね。もっともっといろんな人から愛されていることに感謝しなければならない、いろんな人に助けてもらているってことに感謝しなければならない。不完全なるがゆえにですね、多くの人に世話になっているというですね、自分一人で生きているんじゃない、家族に支えられて、同僚に支えられて、そういうことで初めて活動できるということになっているので、皆に助けてもらっているという感謝がですね、非常に大事だと。残念ながらまだ感謝が浅い。本当に人間は不完全な存在だと自覚したならば謝罪、謝るという気持ちが出てくる。感謝を超えて、ごめんね、許してねと言ってですね、自分の至らざる気持ちを詫びるという気持ちはなかなか現実的には難しいというか、なかなか人は謝ろうとしない。ついつい言い訳、言い逃れをして、そして自分の責任を転嫁する醜い生き方になってしまう人も多い。だけど本当に自分が不完全だと分かっていれば不完全なるゆえにどれほどに人に迷惑をかけているだろうかということを考えて、感謝と謝罪という、ありがとうとごめんねをちゃんと言える、そういうことも組織というものの潤滑な運営をしていくために、非常に大事な人間性であります。少しでも人に嫌な思いをさせたり迷惑をかけたならば、即座に謝るというね、そういうことも心がけておかないと、本当は謝らなければならないときもまぁいいかといってしまうと後々までその遺恨が残ってですね、だんだんと人間関係が悪くなってしまいます。もっともっと気軽にですね、自分は不完全なんだからといってですね、感謝と謝罪という、このことを組織において皆んなでやっていくというね、それがこの組織の和やかさというんですかね、温かみをつくっていくために非常に大事な原理ではないかという風に思っている訳であります。社会というものを考えた場合には、そういうことにですね我々は心がけなければならないと思います。**

**＜人間観＞**

**最後は人間観ですね。人間というものを知っておかないと、人間が集まって作る組織というのはうまくいかないと。人間とは何なのか。基本的な大事な課題は、二つあります。一つは人間というのは誰でも長所半分、短所半分という構造で成り立っています。どんな完璧な人間でも短所が半分ある、長所も半分ある。短所は他人から嫌われて非難されて、他人から嫌がられる部分をどんな人間でも半分は持っているんだと。長所半分、短所半分という構造が人間の構造なんだと。しかも短所はなくならない、長所もなくならない、このことをちゃんと理解して我々は人間と付き合わなければなりません。なんで短所も長所も半分ずつあると考えなければならないのか。なんで短所をなくす努力をしてはならないのか。なんで短所は大事なのか。そのことを知るためにはですね、我々自身もこの大宇宙の一部分であって、宇宙とは何なのか、宇宙というのは基本的にマイナスに評価されるエネルギーとプラスのエネルギーが、エネルギーバランスを模索しながら秩序をつくっているっていうのが宇宙の摂理と言われる原理なんですね。宇宙というのはマイナスとプラスという相反する力が協力し合いながら秩序を作っているというそれが宇宙の姿です**

**から、だから宇宙の中に存在するものは基本的にですね、宇宙の摂理によってつくられますので、一対存在というそういう構造になっているんですよね。宇宙にはプラスとマイナスがある、陰には陽がある、光には陰がある、表には裏がある、半分ずつあるんだと。動物に植物がある、男には女、善には悪、美には醜、真には偽、全部一対の構造で全てのものが成り立っているんですよ。だから人間には長所と短所があるということは、長所も短所も半分ずつあるんだと理解しなければならない。人間も宇宙の摂理によって作り出された命というものを与えられて生きているんですから、宇宙の摂理の外に出ることはできない。人間性も長所半分、短所半分という構造になっているんだと。しかも長所も短所もなくならないんです。なくならない短所をなくそうというほど馬鹿な間違った努力はない。短所は半分なければならない。なぜ短所は半分もなければならないのか。人間らしい心とは謙虚な心だ、謙虚な心をつくってくれるのは短所だ。短所がなくなってしまったら、人間を謙虚にする理由がなくなってしまう。短所がなくなってしまったら傲慢にならざるを得ない。人間らしい謙虚な心を作ってくれるのは短所なんだ。短所が人間の本質なんだ、全部長所になってしまったら神様だ。人間である限り短所は半分なければならない。短所がなくなってしまったら謙虚になる根拠がなくなってしまう。だから短所はなくさないように大事に持っておくことが重要だ。だけど短所が出てきたら嫌われちゃうから、短所はあまり出てこないように気をつけなければならない。だけど人間というものは短所というものをちゃんと知っておく必要がある。短所の自覚が必要なんだと。短所の自覚を持たそうと思ったら、優しく具体的に短所を指摘してあげる教育が必要です。ここがだめじゃないかと叱ったら、相手はむかついてくる。直接的に短所を非難するのではなくて、君はいいところもたくさんあるけど、こういう短所が出てくると損をするし、みんなに嫌われちゃうからその短所があまり出てこないように気をつけようね、という愛を持った諭し方で、その人に自分の短所を忘れないようにさせるということは大事な教え方であります。とにかく短所はなくならないんだ。だから短所をなくす努力はしたらいけないし、短所をなくさせる努力もさせたらいけない。それは価値のない努力だ。逆に伸びる長所をとことん伸ばす努力をすべきだ。長所が伸びて他人から一目を置かれるようになってくると、短所は人間の味に変わって人間味になってくる。人間味があるということは短所があるということなんですよ。短所は長所を伸ばすことによって、人間の魅力に変わる。長所を伸ばさなければ短所はただの短所なんですけども、長所を伸ばすと短所は人間味という味わいに変わって、短所も魅力になってくる。こういう成長の仕方を角熟という訳なんですよね。普通は円熟と言ってまん丸を目指すんですけども、人間には皆んな短所があって欠点があって、失敗もするし、罪も犯すしですね、まん丸にはならない、みんな個性がある。そういうでこぼこだらけのですね、いろんな欠点がありながらもですね、成長していくっていうのは個性が完成なんだ。だから個性の完成される究極の目標は、角ばったままそのまま熟していく角熟こそが個性の時代の人間の完成された姿、目標だと。丸くはなるな、とんがって生きろ、個性を磨いて人のために生きろっていうのをとんがって生きろというのだ。長所を磨いて短所を人間の味に変えていって、長所も短所も輝かせる。これが角熟という人間の目標であります。短所が目立つ人間というのは長所が伸びていないんですね。短所ばかりが目立つ人間は、どんな人間にもいいところは半分はあるんだから、いいところを発見してあげていいところを伸ばしてあげて、いいところを褒めてあげて、それが会社における人使いの原理だ。その人の持っているいいところを使わせてもらう、短所はなくならないのだから、短所をなくす努力は絶対にさせないこと。短所が出てこないように気をつけさせる。短所をなくしたら傲慢な人間になってしまうから、短所をなくす努力はさせない。いいところをどんどん伸ばしてしって他人から一目置かれるようにすれば短所は人間の味になってくる。長所の中の一番優れた部分が天分というものだ。その天分のツボにはまっ**

**たら、すごいことになる。今、本当に10代の子どもたちがですね、素晴らしい天分を発揮して、世界一の大活躍をしております。あれは特別な子にだけできるのではない、みんなできるんだ。その子の持っているいいところを小さいうちから伸ばしてあげたら誰でもあんな天才になるんだ。だけど学校教育というところは、子どもの才能をつぶすところですからね。学校教育というのは、生まれたときは神童で、5歳で天才で、10歳で秀才で、学校を出たらただの人っていうのがね、学校教育の現状なんですよ。ただの人にされちゃうんです。だから独特の才能を発揮してやろうと思ったら親が頑張らなければならない。学校の勉強なんか放っておいて、親が子どものために一生懸命に努力する。子どもが素晴らしくなったら親の人生は素晴らしいものになる。それほどにも子どもの人生は大事だ。子どもが犯罪を犯すようになってしまったら親の人生もめちゃくちゃになる。本当に教育は国家盛衰の要、教育は企業消沈の印、教育は一家存亡の鍵を握る大事業だ。昔から実るほど頭を垂れる稲穂かなという言葉があってですね、地位が上がれば上がるほど自分の短所をさらけ出して部下に助けてもらって、部下を褒め称える、そうすれば部下は上司のために働いてくれる。だけどほとんどの上司は部下を頼りなく思ってしまって、叱るだけです。だから部下は伸びない。上司から見たら部下はみんな頼りなく見えるものなんですよ。熟練者から見たら、なんとなくまかせておけないと見えるものなんです。そこのところをけなさずにですね、部下の持っているいいところを見つけ出してあげて、いいところを使った仕事をさせてあげて、自分の仕事を分け与えてですね、持っている能力を伸ばしてあげて磨いてあげて、褒め称える。そうしたらますます部下は上司のために働いてくれる。地位が上がれば上がるほど部下が増えてくるんだから、自分の短所をさらけ出して、助けてもらって仕事をさせるというですね、力をリーダーは磨いていかないとリーダーとしての役割を果たしていない。短所をさらけ出す勇気を持たないと組織人としてリーダーは務まらない。人間の本質は理性ではない心だ。理屈はたくさんだ、心が欲しいとみんな叫んでいるんだ。心をあげたら心が通い合う、心が通じ合う、心に絆ができる。会社といっても人間が作っているものですから、人間の本質は心ですから、会社の土台に置かなければいけないのは心のつながりなんだ。だけど、理性で作った会社というのは仕事のつながりと役職のつながりという、この合理的なシステムで動いているんですよ。だけどこのつながりだけで動いている会社で働いたらみんなストレスがたまってきて、そして病気になるんですよ。いま、どうしたら企業に温かなぬくもりを持たせることができるのかという、企業の人間化というものが経済界の中で、これからの企業のあり方としてよく語られる言葉であります。企業と言っても人間が作っている組織だ、人間の本質は心だ、だから企業の土台にしなければならないのは心のつながりだ。この理屈を超えた心のつながりが持てれば、どんな理性的な問題も全部乗り越えられる。心がひとつになったら、あらゆる理屈の対立は乗り越えられてしまう。心をひとつにしたらどんな家庭の問題も乗り越えられる。全社員が心をひとつにしたらどんな会社の問題も乗り越えられる、全国民が心をひとつにしたらどんな問題も乗り越えられる、全人類が心をひとつにすれば、どんな世界の問題も乗り越えられる、心をひとつにするということは、あらゆる理屈を越えるための大事な原理であります。ところがみんな心がすれ違っているんだ、お父さんお母さんは子どもを愛しているって言うけど、子どもはお父さんお母さんなんか全然俺のことなんか分かってないわと愚痴を言う。夫婦もすれ違っている、親子もすれ違っている、会社でもすれ違っていると。愛のすれ違い、心遣いのすれ違い、噛み合っていない。これが組織の最大の弱点だ。そのためには心のつながりを作っていかなければいけない。みんな心が欲しいと思っているのにあげているのはみんな理屈だ。理屈さえ通ったらなんでもうまくいくという気持ちがまだあるんですよ。理屈が通っても心は満たされないんだ。心が満たされたら理屈なんてどうでもよくなってしまう。究極は心を満たすことだ。心が欲しいという叫びの中で**

**求められていることは全部で七つある。みんな認めてもらいたい、分かってもらいたい、褒めてもらいたい、好きになってもらいたい、信じてもらいたい、許してもらいたい、そして待ってもらいたい。これが職場で心がほしいと求められている内容なんです。だからこの心のつながり、心の通い合い、心の絆を作っていこうと思ったら、心をあげるということをせんとバーナードね。求められていることに対する努力をすることが大切だと思います。この努力の姿をみせるということが愛なんですよ。思いやりというのは思っているだけではだめなんだ、思いやりは思いを行動や言葉にして出すことを思いやりと言うんだ。愛は努力だ、相手のために努力をすることをしなければ失せてしまう。相手のために努力する力があれば愛は残っている。相手が自分のことをどの程度思っているか知ろうと思ったら相手が自分のためにどこまでの自己犠牲的努力をしてくれかを見ればわかるし、また自分がどの程度相手のことを愛しているかどうか知ろうと思ったら、自分が相手のためにどのくらいの自己犠牲的努力ができるかどうかを見ればわかるんだ。愛の実証は努力だ。努力して相手の目の前で行動を見せないと相手には通じないんですね。まずはみんな褒めてもらいたいんだ。注意をするんだったら、褒めてから言ってもらいたい。順序は大事だ。努力を見せれば相手は喜ぶんだ。信じてあげる努力をする、許してあげる努力する、そしてちょっと待ってあげる努力をする。それが愛だ。みんな愛を求めているんだ、心を満たされたいんだ、心が欲しいんだ、これからの企業は土台に心の通い合いが大切だ。その上に仕事の繋がりがあって、その上に役職の繋がりを乗せて、三次元構造でこれからの企業は運営をしていかないと、企業に人間のぬくもりができない。企業の人間化というものは心の結びつきをすることによって初めて成り立つものなんだ。心の結びつきがなかったら企業は必ず内部分裂して対立して派閥ができて、そして団結力は緩んでくる。心の繋がりを作ることのよって企業のストレスは大幅に減少する。お互いに思いやり心遣いというものが感じられればストレスは大幅になくなる訳ですよ。心が通じ合えば仕事の効率が上がってくる、すれ違いがなくなってくる、スピードも速い。そういう心を大事にする企業風土を是非作ってもらいたいと思いますし、人間なんだから短所半分、長所半分あります。長所でお互い助け合って、短所は責めないで助けてあげようというそういう気持ちになることが心ある対応だと。人の短所を責めるのは心ない対応だ。**